

平成 28 年度  
玉城町社会福祉大会

# 福祉の作文集

---

---



玉城町社会福祉協議会

# 目次 『福祉の作文』

特選

《小学生の部》

笑顔のために出来る事

有田小学校 六年 山下

怜れい夕ゆ・・・1

《中学生の部》

高齢社会で思うこと

玉城中学校 二年 奥野

恭きょう平うへい・・・2

入選

《小学生の部》

一人一人助け合える心を持つて

外城田小学校 六年 磯崎

真ま依い・・・4

家族が病気になって

田丸小学校 六年 金谷

幸こう之の介すけ・・・6

わたしのおじいちゃん

有田小学校 五年 早水

里り緒お・・・7

はじめてがたくさん

下外城田小学校 四年 沖田

芽め以い菜な・・・8

《中学生の部》

ぬくもりのある心

玉城中学校 一年 八木

琴こと香か・・・9

特選

## 『笑顔のために出来る事』

有田小学校 六年 山下 怜夕

今年の夏休みに、友達のお母さんが働いている介護老人保健施設の福祉体験教室へ参加しました。私は以前から、もつとお年寄りの方達とふれ合ってみたいと思っていたので、参加する前からとても楽しみにしていました。

まず、車いすの使い方を教えてもらいました。何度か見たことはあったけど、乗った事も操作した事もなかったので、乗っている人がどんな気持ちなのか分かりませんでした。乗ってみると、普段何気なく歩いているような道なのに、すごくガタガタするように感じて、落ち着きませんでした。今までは、車いすに乗っている人は、座って操作をすれば自分で動かなくてもいいのだから、きっと楽なんだろうと思っていました。でも本当は、とても不安でこわい思いをしているという事を知りました。

その施設で働いている人達の大変さも初めて知りました。ご飯を食べさせてあげたり、一緒にリハビリをしたり、他にもたくさん仕事を覚えてもらいました。どれもすごく大変そうでした。お年寄りは、介護をしてくれる人がいなかったら、一人で日常生活を送る事が難しくなるという事を、あらためて感じる事ができました。

私も介護のお手伝いをする事になったのですが、初めての体験だったので、何をどうすればいいのか分かりませんでした。

た。今まで、うまく会話が通じないくらい高齢の方達と一緒に過ごした事が無かったからです。そもそも、子供でも出来る介護とは何だろうと考えました。私は特別な知識もないし、大人のような力もありません。私でも役に立てる事はあるのか、急に自信が無くなりました。働いている方に気持ちを話すと、

「ご飯を運ぶ事や、トイレに行こうとしている人の手を引いてあげる事、一緒にいて話をしながらあげる事も介護だよ。」と教えてくれました。それなら私でも出来ると思ひ、うれしくなりました。教えてもらった通り、声をかけて、一緒にあげただけでも、お年寄りの方達はすごくうれしそうに笑顔を見せてくれました。その笑顔を見て、私も幸せな気持ちになりました。まずは、こういう事から始めたらいいんだと、自分で感じる事が出来ました。

今までは、介護というものを身近に感じていなかったし、介護をするという事を、もつと難しく考えていました。でも、この体験を通して、私の小さな力でも出来る事があるのだと知りました。これからの高齢化社会は、助けが必要なお年寄りがさらに増えます。家族だけではなく、地域の中でみんなが助け合わないと、お年寄りを支えていけないと思います。私も、子供だからまだ無理だと思わず、おじいちゃんやおばあちゃん達が、笑顔で過ごせるために何か出来る事は無いか、これからもしっかりと考えていきたいと思います。

特選

## 『高齢社会で思いつく』

玉城中学校 二年 奥野 恭平

僕の家にはオレンジ色のリストバンドがあります。このバンドは僕が認知症キッズサポーターである証です。僕は小学六年生の時に福祉体験教室に参加して、認知症について勉強して、このバンドをもらいました。その体験教室で経験したことは僕に高齢社会というものの大変さを教えてくれました。

高齢社会の重要な課題のひとつで老後の最大の不安が認知症だそうです。認知症になると、それまでできていたことができなくなるそうです。覚えられない、すぐ忘れてしまう、時間や場所や人がわからない。そして認知症が進むと食事をしたり、お風呂に入ったり、トイレへ行ったりといった基本的なことでも一人ではできなくなります。その話を聞いた時、僕は不安な気持ちでいっぱいになりました。父や母、僕もいつかは認知症になるかもしれない。その時、どんな気持ちになるんだろうと思うとドキドキしました。そして、それまでは自分が年を取った時のことなどあまり考えてなかったけれど、僕も将来、高齢者になっていろいろな事ができなくなるんだと改めて思いました。

僕は正直言ってお年寄りの事をあまり良く思っていないませんでした。同じ事を何度も聞くし、大きな声で話すし、何を言っているかわからない時もあります。自転車で僕が道路を走っているとヨロヨロと道を横断しているお年寄りがいて、

「邪魔だな」と思ってしまう。でもこれは、年を取ると体のあちこちの機能が衰えてしまうので仕方がないことなんだなと思うようになりました。

僕には度会町に祖父母がいます。今は二人共、畑仕事などを自分の体と相談しながら、のんびりやっています。一緒に暮らしていないので、めったに二人に会うことはありません。でも、毎日顔を見ているとわからないけれど、たまに会うから気付くこともあります。それは「衰え」です。僕が小さかった頃は祖父とボール遊びをしたり、買い物に連れて行ってもらったりしました。でも、今は会うたびに祖父が弱っているように見えます。息をする音が「フー、フー」と聞こえるし、歩く様子も前と比べるとトロトロしています。顔もしわくちや、腰も曲がっていつている気がします。祖母が言うには「時間があれば、リビングで寝ころがってる。」そうです。これは祖父がぐうたらになったのではなく、きつと年のせいなんだと思います。それと時々、僕が言った事にも返事が返ってこなかったり、おかしい答えが返ってきたりすることがありました。そんな時、僕は耳が悪くなったのかな、認知症の始まりじゃないのかな、と不安になります。それと同時にこの先のこの二人の生活は大丈夫かな、と思うようになります。

僕のすんでいる日本は六十五才以上の高齢者が総人口の二六・七%です。四人に一人以上が高齢者です。周りはお年寄りだらけです。きつと、認知症の人もたくさんいるし、これからどんどん増えていくと思います。お年寄りがお年寄

りを介護しなければいけない時代です。介護疲れから殺人を  
してしまうことや老人ホームでの虐待などのニュースも後  
を絶ちません。お年寄りの人たちだって好きで介護をしても  
らっているわけではありません。本当は全部自分でやりたい  
はずですが、でも、できない。すぐくつらく、悲しい気持ちで  
いっぱいだと思います。もし、僕が誰かを介護しなければい  
けない時になったら、そのお年寄りの人の気持ちを考え、自  
分もいつか、同じような立場になる事を忘れずに接したいと  
思います。

僕は福祉体験教室で学んだ事で忘れてはいけないなと思  
ったことがあります。それは認知症の人の尊厳を守るとい  
うことです。「自分は生きて良いんだ」と思ってもらう事が大  
切だということです。お年寄りの人は物知りで今の日本を作  
ってくれた人生の大先輩です。僕も将来、年をとって、周り  
の人に助けってもらわなければいけなくなると思います。その  
時にどうしても嬉しかったら嬉しいのか、それを考えてこれから  
はお年寄りに関わりたいです。そして温かい目でお年寄りを  
見守り続けたいです。それが認知症キッズサポーターである  
僕の役割だと思います。



## 『一人一人助け合える心を持って』

外城田小学校 六年 磯崎 真依

私は、「楽笑会」を行うに向けて、招待状を書きました。

プログラムを分かりやすく書いたり、干し柿の絵や季節の食べ物に絵を描いたりして、私なりに楽しんでもらえるように工夫しました。そして、「楽笑会」が開催され、お年寄りの方が私の書いた招待状を楽しんで見てくれていてとてもうれしい気持ちになりました。お年寄りの方は、リコーダーや歌の発表でも笑顔ではなく手してくれました。お年寄りの方が喜んでくれると見ている方もうれしく感じるんだなあといい、人の気持ちになって、どうしたら喜んでくれるのか考えていきたいと思いました。

私のひいおばあちゃんも、こけたりしただけで骨にひびが入ってしまうような体になってきて、とても高齢だと思えます。だから、休みの日やひまがあるときなど、ひいおばあちゃんの家に行って、どこかへいっしょに出かけたりもしています。まだ、自分で歩いて元気に見えても、自分だけではできないことがまだまだあると思います。だから、私やおばあちゃんが買い物をしたり、手伝いをしに行ったり、助けに行ったりもしています。こんな行いを少しだけでもいいので行動していくことが大切だと思いました。でも、私は、人見知りで、困っているお年寄りの方がいても、声をかけることができませぬ。あと一歩の勇気をふみ出せない自分がとてもいやでした。それでも、「大丈夫ですか。」「手伝いましょうか。」

と声をかけることができました。しかし、話が合っていないようで、いきなり違うことを話しかけられて、私はどうすればいいか分からなくなったことがあります。でも、家族にそのことを話してみたら、お母さんに「それでもいいわかんよ。ちゃんと手伝ったらないかんさ。」と言われました。私はそうしたいという気持ちもあつたけど、言えない自分もいて、とてもくやしかったです。家族と出かけた時、お母さんは、困っている人を助けたり、重たそうにたくさん荷物を持っているお年寄りの方がいたら遠くにいても走ってかけつけたり、車いすの人が困っていたら助けたりしていました。私は、このようなことができるお母さんがとてもすきで、すごいことだと思っています。こんなに人のことを思い、助けることができる人がこんなに近くにいるのに私は何もできないで、ただ見ているだけなんてできませんでした。近所のお年寄りの方の買い物まで引き受けたりしている人もいます。

それからは、私も困っている人がいたら、助けられるようになりました。助けてもらった方は、うれしい気持ちになると思います。少しの手伝いをしただけで、とても楽になったり少しだけうれしかったりと、人それぞれいろいろと感じると思います。でも、私は、それでいやと思う人はいないと思います。だから、少しでもお年寄りの方や困っている人がいたら、自分から行動し助けることを一人一人意識していくことが大切だと思います。まず、勇気を出して一歩ずつ行動していきたいです。

『家族が病気になって』

田丸小学校 六年 金谷 幸之介

今年の春、大切な家族が病気になりました。それまでは、いつもいることが当たり前だと思っていた家族がたおれて、意識がなくなってしまったときは、

「いなくなってしまうたらどうしよう」と、ふるえてしまいました。

救急車に乗ってから、救急隊員の方が血圧をはかったり、病院に連らくを取ったりしてくれていました。病院につくまでの時間は、とても長く感じました。

病院に着いて、手術をしなければいけないことを聞いて、もっと不安になりました。でも、先生や看護師さんのおかげで手術は無事成功しました。

ぼくは、毎日病院へ会いに行きました。手術が終わったばかりで、体を動かかせないので、看護師さんが、ごはんを食べさせてくれたりいろいろなお世話をしてくれていました。とてもやさしくて、心配してくれているんだなあと思いました。今までならぼくがしてもらう事のほうが多かったけど、ぼくも足のマッサージをしたり、お茶を飲ませてあげたりして、すこしでも早く元気になるように手伝いました。

病院では、他にもたくさんの人にお世話になりました。リハビリの先生は、歩く練習や、指の体操をしてくれたりしました。家族が入院するまでは、病院の仕事といったら先生や

看護師さんぐらいしか知らなかったけど、理学療法士、作業療法士、言語療法士、ソーシャルワーカーなどたくさんのお仕事があることを知りました。

家族がたおれたときは、

「このまま元気にならなかつたら。」

と考えると夜もねられないことがあってぼくの目の前は真っ暗だったけど、病院のたくさんのおかげで元気になって、ぼくも元気になることができました。お世話になった皆さんの人に感謝しています。

ぼくも、これからのふだんの生活で、まわりの人に役立つことをもつとしていきたいと思いました。学校では、友達に困っていたら助けてあげたいです。家では、もっと手伝いをして、家族を助けてあげたいです。そして、大きくなったら人から感謝され、人の役に立つような仕事をしたいと思いました。



## 『わたしのおじいちゃん』

有田小学校 五年 早水 里緒

わたしは、あまり福祉がなんなのかわかりません。辞書で調べたら、「幸せ」「豊かさ」と書いてありました。お母さんがよくふつうの生活の毎日が健康で過ごせる事が幸せだと言っています。人によって幸せの意味はちがうと思います。だれかの力になりたいと思うこと、喜んでもらおうと思う気持ち、幸せだと少しでも感じてもらう気持ちかなと思いました。

人の助けを借りずに生活を送る事は、病気の人にはこんなんだと思います。私の身近にもたくさんいると思います。こまっている人を見かけたら声をかけて助けてあげたいと思います。その行動がその人たちの力になって幸せや喜びとして感じてもらえたらいいけど、それはわかりません。わたしのおじいちゃんは長い間病気で苦しんでいました。最初は人の手を借りずに生活を送っていたけれど、年月が経つにつれて歩く事すら出来なくて、こ吸する事も機械の力を借りずには出来ない状態でした。私は、子どもだから手助け出来る事は少ないけれど、子どもだからこそ、おじいちゃんの気持ちになって同じ目線にもなっている事があります。

私が小さいころ、お母さんは仕事で家をするにする事が多かったから、おじいちゃんがお母さんのかわりに世話をする事が多くてごはんを作ってくれたり、おむつをかえてくれた

り、ほいく所のおくりむかえをしてくれたりしました。おそ  
うじもきれいにしてくれました。私たちがするよりもきれいに  
してくれていました。お母さんは、とても助かっていたと思  
います。おじいちゃんは、家では動いたり話したりする事  
も苦しそうにしていました。ボンベとおじいちゃんの命をつ  
なぐ長いくだがあって何かをする時にからまって、おじい  
ちゃんの動きをじやましていました。私は、スムーズに動ける  
ようにほだいてあげたり、おふるには苦しくてあまり入れな  
かったので体をふいてあげたりしました。おじいちゃんは、  
いつもありがとうと言ってくれました。

私もおじいちゃんから言われると、とてもうれしかったで  
す。おじいちゃんは最後の方は病院としせつの往復で家には  
帰ってこれなくて、とてもさびしそうでした。話し相手がほ  
しかったと思います。体を自由に動かす事は出来なかつたけ  
ど、酸素をすいながらでも話をする事は出来たのでかわりに  
手紙を書いてとどけたりしました。毎日に行けなかつたけど、  
おじいちゃんはすごく喜んでくれました。今はもう天国にい  
ってしまったけど、おじいちゃんは空から見守ってくれてい  
ると思います。おじいちゃんにしてあげたかったことはたく  
さんあります。おじいちゃんと同じ病気をもち人はたくさん  
いると思うけど、その人たちが安心して生活できるかんきよ  
う作りが大切だと思います。健康な人たちがもついろいろな  
目線に立って考えて努力していかなければなりません。



入選

## 『はじめてがたくさん』

下外城田小学校 四年 沖田 芽以菜

私は、福祉の学習をしました。

西野さんとの出会い学習をしました。西野さんは約三十年前に事ここにあつて、それからずっと車いすに乗っているとおっしゃっていました。

そのあと、車いす体験をさせてもらいました。私は、車いすに乗るのは今日が初めてでした。だから、コーンを曲がる時、どうすればよいか、こんがらがって、ひよろひよるなそうじゅうになりました。それに、車いすで前に進むのには、だいぶ力があるので、少しのきよりも手がつかれました。だけど西野さんはコーンをスイスイよけて、すぐゴールしました。

私が思ったことは、車いすは、体力も使うし、しょうがい物をよけるのも一苦ろうなので車いすに乗っている人がいたら、前にあるものをどけたり、物を落としてしまったら拾ったりして、今、自分のできるせいっぱいのことをしたいです。

次に外で、車いすに乗っている人のかい助をしました。

「だんさがあります。」  
とか

「のぼります。」

とか声をかけるのをわすれてしまったこともありました。か

い助される側になったら、乗っていてすごくこわかったです。私は「本当に、だいじょうぶかなあ…。」と思いました。だから、かい助する時は、必ず、声をかけなければいけないと思いました。

私は、耳の聞こえないくす川さんやすぎさんと出会って、思ったことがたくさんありました。手話を教えてもらったとき、はじめに思ったことは、「手話にはいろんな意味があつて、顔の表じょうや体を使つて言いたいことを表しているんだな。」と思いました。「生活の中で使う手話を、全て覚えているくす川さんとすぎさんはすごい。」と思いました。

一番びっくりしたのは、耳が聞こえないと言葉をわすれてしまうことです。くす川さんもすぎさんも、本は読んでいるけど、分からないことがあつたら人に聞くのには、すごく勇氣がいると思いました。

それに、「手話を使つてはいけない時もあつた。」と聞いて、耳が聞こえなかつたすぎさんとくす川さんは、ものすごく大変だつたと思いました。私は耳が聞こえないのはすごく大変だと分かりました。

私が福祉学習をして一番印象的だつたのは、笑顔です。西野さんも、すぎさんもくす川さんも、にこにここと笑っていました。

私は福祉の学習をして、耳の聞こえない人や車いすに乗っている人を助けられる人になりたいと思いました。

『ぬくもりのある心』

玉城中学校 一年 八木 琴香

「また来てえな。」と笑顔でいう私の祖母は今、介護施設でお世話になっています。

幼い頃から祖父母の家に行くと、一緒に遊んだり、読み書きしたり、ホットケーキを作ったり私の面倒をみてくれました。だから私は祖父母に会うのがとても楽しみでした。

でも、七年前に祖父が他界し、その後祖母は、自転車で転倒してからひとりで生活することが難しくなりました。私は、祖母が自転車で転倒しただけなのに、手術しても歩けないと聞いた時、とても辛く悲しくて涙が止まりませんでした。転倒する一日前に、祖母と母と私の三人で買い物に出かけた時が、最後の祖母の歩く姿でした。

生きていく中、何が起きるか誰にもわからないことで、祖母の気持ちを考えると、涙がとまりませんでした。

苦しくて、やりたいことが出来ない祖母に喜んでもらおうと思い、お見舞いに行き、折り紙で何かをプレゼントしたり、私の身近な出来事をたくさん話したりしました。何か私にできることはないかといういろいろ考えました。

ある時「生きているのがつらい」と言ったことがあり、私は自分の身体を思うように動かすことができず、食べたい物も好きに口にするのができない事は、つらいなあと思っていたら、祖母の思いは私と違い、人にお世話になり迷惑かけ

ていることがつらいと言うので、私は自分はずかしく思いました。コップ一杯の水も一人で飲むことができないことがつらいのではなく、誰かの手をわずらわせることがつらいということです。相手の気持ちになって考える祖母が、とても大きく優しい温もりのある人で嬉しかったです。

でもそんな祖母でも、食事の時、気がすすまないのか食べないことがあります。介護職員さんが困っている時、私が祖母の側に行き、「おばあちゃん、一緒に食べよか。」と声をかけると、うなずき、一口一口ゆっくりですが完食することができ、私はうれしさでいっぱいでした。介護職員の方が「さすが孫の力。」と驚かれると同時に「毎日来てくれると助かるわ。」とおっしゃって見えました。

介護はとても難しいと思います。相手が身内なら、なおさらのことかもしれません。相手も一人の人間であるし、きれいなことばかりではありません。特に高齢化社会の中で、誰にでも起り得る認知症は、介護者の気持ちに相手に伝わらず、はがゆい気持ちになることもあると思います。温かい心を持ち続けるには、何が必要なのかと考えると、その人を理解し、支え続けるには、体力や精神力は欠かせないと思います。

今私に出来ることは、思いやりの気持ちを忘れず、祖母や周りの人達とも笑顔で接していきたいです。

「また来るでな。」がいつまでも続くことを願っています。

平成二十八年年度

玉城町社会福祉大会

「福祉の作文」審査委員

(敬称略)

玉城町長

玉城町社会福祉協議会

会長 辻村 修一

玉城町教育委員会

教育長 田間 宏紀

玉城町校長会(外城田小学校)

代表 浦田 孝司

玉城町生活福祉課

課長 西野 公啓

玉城町社会福祉協議会

事務局長心得 見並 智俊